

社会福祉施設におけるボランティア継続の理由

～高齢者福祉施設「西院」の継続ボランティアの要因分析から～

南 多恵子

I. はじめに

社会福祉施設（以下、施設）におけるボランティア。これは、わが国でのボランティア活動の形態としては、最もよく知られた、今では古典的ともいえる活動の1つではないだろうか。その施設では、様々なボランティア活動が展開している。中でも、レクリエーションや行事などの単発型の活動、利用者の話し相手や環境整備など長く関われる継続型の活動がよく知られている。岡本（1981）は、対人援助活動であるボランティア活動となったときには、一定の継続性が必要であり、継続性を基に利用者ボランティアとの信頼関係が生まれると述べている¹。施設とすれば、受け入れたボランティアには、できるだけ長く継続的に参加してもらえればありがたい。だがボランティアはあくまで個々人の自由意志に基づいた活動であり、無理強いはできない。ボランティアそれぞれの事情や条件も異なる。ボランティアに継続してもらいたいが、実際には継続が難しいことは、施設にとってボランティア受け入れにおける主要な課題である²。

現在、施設にとって、ボランティアの存在はいつくかの論点からますます求められているといってもいいだろう。第1の理由は、利用者への支援の質を上げることができるという点である。より良い支援をするためには、限られた人数で対処せざるを得ない特定の専門職のみが関わっていても自ずと限界がある。多様な地域の住民がボランティアとして関わることで、彩り豊かな支援に繋がっていく。支援の向上は、専門職の願いでもある。第2には、施設周辺の住民の社会参加の場の提供、居場所にもなるという点である。地域に貢献したい、施設利用者のために何かしたい、福祉が学びたい、地域で何か役に立ちたいといった住民の参加の意欲を受け止めることにもなる。また理解ある住民が施設の周辺にいることで、施設と地域との懸け橋にもなる。第3には、施設のある地域福祉の推進、ま

ちづくりという意味がある点である。特に、この第3の意味は、ここ数年の間に拡大しつつある。それは、地域包括ケアシステム³、地域共生社会⁴の実現が謳われ、地域の福祉課題に関心を持つ住民が増え、支えあい助け合う関係を構築していくことは時代の急務となっている。また、2017年の社会福祉法改正により、社会福祉法人の改革が迫られていることも大きい。「地域における交易的な取り組みを実施する責務」が義務化され、施設の持つ専門性やポテンシャルを活かし、地域福祉推進に資する取り組みを実施する必要が益々生まれている。ボランティア受け入れは、地域と施設と繋ぐ大切なチャンネルの1つとして、この先も丁寧に取り組んでいくことが求められる。

そこで本稿では、施設におけるボランティアの継続をテーマに探究していく。高齢者福祉施設「西院」⁵（京都市右京区）の協力のもと、そこで継続して活動するボランティアが、なぜ継続できているのか、その理由を洗い出し、分析を試みたい。そして、ボランティア受け入れ対し、どのような準備をし、どのような対応をすることで継続に繋がるのかを考察していきたい。

II. ボランティア参加の理由とは

一般的に、ボランティアが継続する理由を探る前に、人はどのような理由でボランティアに参加したのかを捉えておきたい。つまり、ボランティアを始めるにあたり、何に期待をして活動に参加したのかという点を2つの調査から概観する。

平成29年3月に内閣府が発表した「平成28年度市民の社会貢献に関する実態調査」によると、ボランティア活動に「参加したことがある」と回答した人の参加理由は、「社会の役に立ちたいと思ったから」（47.7%）、「自分や家族が関係している活動への支援」（30.4%）、「自己啓発や自らの成長につながると考えるため」（30.1%）と続き、以下、「職場の取組の一環として」

(20.1%)、「知人や同僚等からの勧め」(10.0%)、「自分が抱えている社会問題の解決に必要なだから」(6.6%)、「社会的に評価されるため」(1.9%)、「その他」(13.2%)となっている⁶。

また、東京五輪を控える東京都が平成28年に行った「都民等のボランティア活動等に関する実態調査」⁷によると、「何か社会の役に立ちたかったから」(37.7%)、「興味を持ったから」(29.5%)で、あとは「周りの人がやっているから」(15.2%)が割合的に多く、「自分の技術や能力、経験を活動に生かしたかったから」(10.3%)、「活動を通じて友人や仲間を増やしたい」(11.7%)、「余暇時間を有意義に過ごしたい」(10.6%)、「身近に放っておけない問題や課題があったから」(10.3%)、「就職や進学に有利になると考えたから」(3.8%)、「特に理由はない」(13.5%)、「その他」(3.8%)、「無回答」(2.0%)となっている。

このことから、理由はいつくか大別できることがわかる。ボランティア活動の原則、自発性、社会性、無償性の“社会性＝社会の役に立つ”ことは確かに理由の上位に挙げられている。そして、「自己啓発や自らの成長につながると考えるため」という自らの力を社会に生かすことで成長したいというものもある。しかし、「自分や家族が関係している活動への支援」「職場の取組の一環として」、「知人や同僚等からの勧め」、「周りの人がやっているから」といった、社会性を帯びたとは言いがたい理由や、「社会的に評価されるため」や「就職や進学に有利になると考えたから」といった利己的なみられる。中には、「特に理由はない」という確固とした目的意識がなくとも参加している人がいることも伺える。前述したとおり、ボランティア活動には自発性、社会性、無償性が包括されているが、社会のために役立つ活動プログラムに参加することだけでボランティアが期待することが充たされる訳ではないことがこの結果からは確認できる。

Ⅲ. ボランティアの活動継続の要因とは

次に、ボランティアが実際に継続するための要因は何なのかを探る。前章で挙げられている活動の動機が充たされれば良いのか、それとも別の要因があるのか、という点である。橋ら(2019)らは、スポーツ・ボランティアをテーマに参加動機、参加継続を促進する因

子および参加に関する不安要因を検討している。それによると、研究協力者であるボランティアスタッフの参加動機の上位3位は、「スポーツへの関心」「自分自身が成長したい」「社会的な視野を広げたい」であるという⁸。しかしながら、活動に参加して成果があったと感じていることも尋ねたところ、「所属感を感じるところ」が終了時の成果として高い値を示したという。これは自分にとって居場所があるという集団への帰属意識を指すとし、「スポーツへの関心」「自分自身が成長したい」「社会的な視野を広げたい」といった項目では、開始当初に期待に対して、終了時の成果としての評価が低くなった。そして、「重要なことは、うまくいかない場面に出会ったときに、1人で悩みを抱えさせてしまうのではなく、仲間や先輩と経験を共有できる関係性をまずは構築していくことではないだろうか。ともに改善策を考え実践する取り組みが、集団への所属感をより強めボランティア活動の継続につながっているのではないかと考えられる。知識や技術の習得や向上には程度の時間と経験を必要とすることを理解し、成果を急ぐことなく人材育成に時間をかけることの重要性を理解することもボランティア組織運営には必要であろう。」と考察している。⁹

勝又ら(2016)が行った病院ボランティアを対象とした継続要因の調査でも、「病院ボランティアへ参加する高齢者の活動は、共に病院を創るとの思いやボランティア間の絆が活動の継続要因」であるという考察を示している¹⁰。

桜井(2005)は、ボランティア活動の継続要因を明らかにする目的で、287人のボランティアを対象に調査を行った。サンプルを若年層(30歳未満)、壮年層(30歳以上60歳未満)、高齢層(60歳以上)の3つの年齢層別に区分して分析を行った。その結果、年齢層毎に、活動継続要因は異なっていた。若年層では活動を通じてのやりがいや適材適所、若年層ボランティアの活動継続を促進していると考えられるとしている。壮年層では、ボランティア同士のコミュニケーションやボランティア団体のへの所属意識への満足とあり、高齢層ではまったく見返りを求めない利他的な動機を持った者よりも、ボランティア活動を通じてさらなる自己成長を期待している者が活動を継続しており、なおかつ、社会的に役立つことを望み、そして活動を通じてその実感が得られている者の方が、活動を継続し

ていると考えることができるとしている。また、生涯学習の観点から、そこで知識・技術を習得し、その学びと連動したボランティア活動が高齢層では定着していることも指摘している¹¹⁾。

これらのことから、ボランティアが参加する際に持っていた参加の理由とは別の要因が継続には影響しており、多世代のボランティアの参加と継続を図るためには、彼らが魅力を感じる（活動継続要因に配慮した）ボランティア活動となっているかどうかを鍵といえる。だが、本節で示した調査には、施設を対象としたものはない。そこで、高齢者福祉施設「西院」の実態から何が汲み取れるのかを、次章で検証していきたい。

Ⅳ. 高齢者福祉施設「西院」におけるボランティア継続の理由とは

本章では、施設でのボランティア継続を可能たらしめる理由は何かを探るため、高齢者福祉施設「西院」(京都市右京区)においてボランティアを継続している関係者6名の協力のもと、継続の理由を出し合い、KJ法でまとめることで、その要因分析を試みる。

1. 高齢者福祉施設「西院」について

はじめに、高齢者福祉施設「西院」の概要を押さえておく。

京都市右京区にある高齢者福祉施設「西院」は、デイサービスや地域包括支援センターなど、いくつかの機能を複合的に有する介護保険事業所である。設立は1999年。当初はボランティアの存在自体が希少で、ボランティアがたった2名しかいない時期もあった。だが、2016年11月4日現在のデータでは、117名のボランティア登録があり、①外出ボランティア(お出掛け・旅行(日帰り・一泊)など)、②曜日ボランティア(デイサービスでの利用者との触れ合い、交流など)、③教室ボランティア(折り紙・麻雀・音楽・映画など)、④披露ボランティア(学生・子供・親子・高齢者などが踊りや音楽などの一芸を披露)、⑤喫茶(コミュニティーカフェの運営)など、活動の幅が広がっており、まさに彩り豊かな施設実践が展開されている¹²⁾。

その他にも、毎月金曜日の晩には多世代型食堂(いわゆる子ども食堂の拡大版)、「西院おいでやす食堂」

も実施している。高齢者福祉施設が、なぜ、子ども食堂を運営するのだろうか。

高齢者福祉施設「西院」の支援対象は、主として認知症高齢者やその家族である。職員は普段の支援を通し、彼らは高齢になっても認知症であってもできることが多くあり、それぞれが持てる力を発揮したいニーズを持っていることを専門的知見から把握していた。究極の目標には働くことも視野に入れていた。それを実現するためには、多世代の多様な人たちが集い、互いを理解し、顔の見える関係になる必要がある。つまり、当事者をめぐる環境が整備されねばならないというメゾ・マクロレベルの課題が横たわっていた。認知症高齢者が理解され、力が発揮できる社会とは、いわば、社会的弱者の立場にある誰もが理解され、認め合い、許容力の深い社会であるともいえよう。各地の子ども食堂誕生の追い風が足がかりにもなり、西院おいでやす食堂は、誰もが暮らしやすいまちづくりに向けた1つの試金石として活動を開始した経緯がある。

その意味で西院おいでやす食堂は、法人資源である高齢者支援の機能や施設という場の提供と、周辺地域の子どもの支援をコラボレーションさせた取り組みである。そこで、食堂に誘う対象者は特に制限せず、誰もが集える居場所とすることは立ち上げ前から方針で打ち出された。実際、参加者の年齢層は大変幅広く、乳児から高齢者までが1つのフロアに集う場面がみられる¹³⁾。

2. 調査対象と研究方法

本研究では、高齢者福祉施設「西院」でボランティア継続をしているボランティアスタッフ6名により、ボランティア継続の理由とは何かを出し合い、それらを対象としてKJ法(川喜多1986)での分析を行った。ボランティアの活動期間は最長13年、最短3年のメンバーが集まった。年代は20代から80代である。活動内容は、デイサービスセンターで利用者との交流活動、一芸披露のボランティア、外出行事での付き添い、いわゆる子ども食堂「西院おいでやす食堂」での活動など多様で、単発で終わるのでなく、活動を継続し続けている人を対象とした。

表1 継続ボランティアの一覧

	性別	年代	期間	参加のきっかけ	主な活動内容
A	男性	70	10年	自宅の最寄りにランチの施設ができた際、ボランティア募集の呼びかけがあった。	・外出行事の付き添い ・施設的环境整備
B	女性	60	13年	先代の所長の頃より参加。	・行事のお茶席を担当 ・デイサービスの利用者との会話、交流
C	女性	70	12年	法人の別法人のデイサービスでボランティアをしており、それが縁で「西院」へも参加。もともとご家族がデイサービスを利用者として通所していた。	・外出行事の付き添い ・デイサービスの利用者との会話、交流
D	女性	40	3年	「西院おいでやす食堂」ができる時、所長から声をかけられた。	・西院おいでやす食堂の活動
E	女性	20	3年	「西院おいでやす食堂」ができる時、大学から声をかけられた。	・西院おいでやす食堂の活動
F	女性	80	5年	徒歩圏内で行ける近所に住まいしていたことから。	・喫茶ボランティアの運営

(筆者作成)

意見はKJラベルに転記し(56枚)、多段ピックアップによって厳選したラベル(38枚)を元ラベルとして、狭義のKJ法を実施した。図1は元ラベルからのグループ編成のプロセスが全て把握できる省略のない図解である。

なお、倫理的配慮としては、参加者と研究目的を共有したうえで、論文化するなど、広く発信していくことの了解を得た。また、ラベル内の表現においては、個人が特定できないようすべて匿名化している。

3. 結果

グループ編成の結果、ラベル群は最終的に、12のカテゴリーに分類された。【ボランティアが得る精神的なメリット、楽しみがある】【福祉実践の最前線を知る楽しみがある】、【通いやすい場所にある】【関わる中で介護や利用者の人となりを理解できる】【居心地のいい空間がある】【物的なメリットがある】【ボランティアが役に立つと思わせてくれる役割がある】【職員と親しくなることに喜びを感じる】という、ボランティア側が得られる部分やりがい、楽しさと、それを生み出す土壌として【明るく周りを惹きつけ、やる気を鼓舞するリーダーの存在】、【ボランティアから見ても利用したいと思える施設実践がある】【しっかりとマネジメントされた施設職員の総合力】【ボランティアが魅力を感じる、施設が備えているストロングポイント】という、いわば施設実践の総合力ともいえる部分、大別して2つのゾーンがあることが見いだせた。

【明るく周りを惹きつけ、やる気を鼓舞するリーダーの存在】

施設実践の総合力を生み出す鍵は、リーダーの存在である。意見の中にも『明るく前向きに、積極的にチャレンジしていくリーダーの姿勢がある』がある。「所長の前向きで明るいところ。」「所長の積極さが魅力。」「所長の、他の施設ではやっていないことにチャレンジしていく姿勢。」というように、前を向き、施設実践をけん引するリーダーの姿勢が影響を与えている。また「所長は他者にやらせるだけの人ではなく、何事も自らも活動し、率先してやっていく人。なので、ついていきたくなる。」「所長がとても頑張っていることが分かるのと、人柄も良く、応援したくなる。」というように『自らも率先して行動し、周囲のヤル気を喚起するリーダーの姿勢がある』という点も同時に挙がっている。他人任せにせず、リーダー自身も汗をかく様子を、ボランティアも目にしてることが伺える。

【しっかりとマネジメントされた施設職員の総合力】

まず、「職員からの声掛けや笑顔の対応がとてもいい」「職員からボランティア参加の声かけをしてくれるので、安心するし、「お疲れ様」と言ってもらって嬉しい。」「職員さんたちのウエルカム姿勢がある。」という『ボランティアからみて、好感が持てる職員の態度・姿勢』があるということ。そして、『施設の方針を職員がよく理解できている』では、「どの職員もボランティアへの対応がいい。教育が行き届いているところ。」「職員さんの人柄が礼儀、人情よい。いい。所長へのサポート良好。対応。」というように、組織体としての成熟度そのものをボランティアがよく観察し

ボランティアを継続する理由とは？

- 1) 2019/8/28
- 2) 京都市西院老人サービスセンター
- 3) ボランティアを継続する理由とは
- 4) 継続ボランティア6名

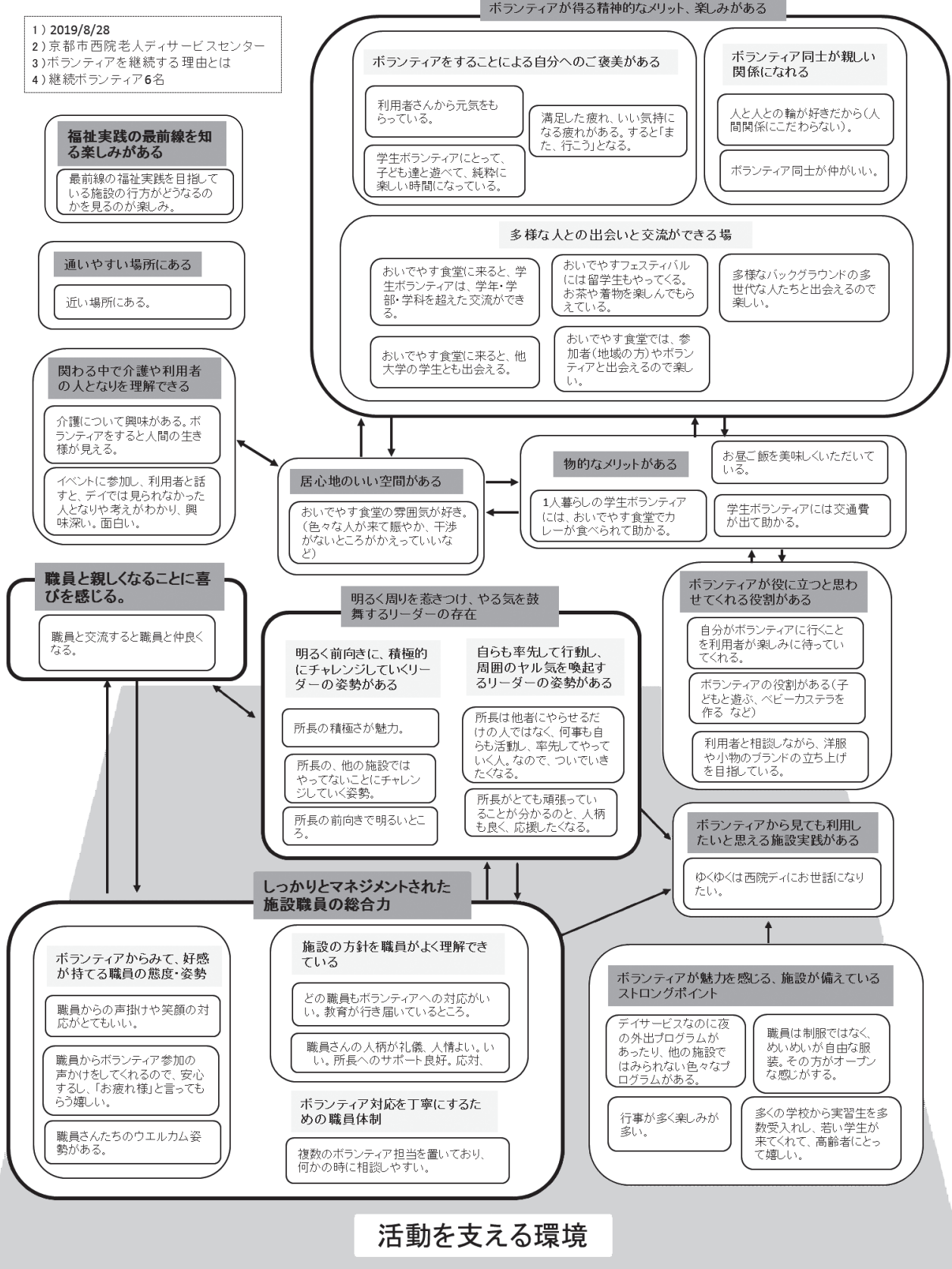


図1 ボランティアを継続する理由とは？

ていることが伺えた。その他に、「複数のボランティア担当を置いており、何かの時に相談しやすい。」という『ボランティア対応を丁寧にするための職員体制』の良さも挙げた。

【ボランティアが魅力を感じる、施設が備えているストロングポイント】

ボランティアから観ても、施設の良いと思えるポイントを備えていることが、継続の理由として挙げられている。「デイサービスなのに夜の外出プログラムがあったり、他の施設ではみられない色々なプログラムがある。」「職員は制服ではなく、めいめいが自由な服装。その方がオープンな感じがする。」「行事が多く楽しみが多い。」「多くの学校から実習生を多数受入れし、若い学生が来てくれて、高齢者にとって嬉しい。」といったものである。

【ボランティアから見ても利用したいと思える施設実践がある】

「ゆくゆくは西院デイにお世話になりたい。」という『ボランティアから見ても利用したいと思える施設実践がある』ことも理由に挙げられている。

【職員と親しくなることに喜びを感じる】

「職員と交流すると職員と仲良くなる。」ことが、喜びに感じることで挙げられている。

【ボランティアが役に立つと思わせてくれる役割がある】

人は“必要とされること”を必要とするという言葉がある。「自分がボランティアに行くことを利用者が楽しみに待っていてくれる。」「ボランティアの役割がある（子どもと遊ぶ、ベビーカステラを作る など）」「利用者と一緒に相談しながら、洋服や小物のブランドの立ち上げを目指している。」というこれらのラベルは、役割があり、求められ、自らの力が発揮できることそのものが喜びであることが伺える。

【居心地のいい空間がある】

「おいでやす食堂の雰囲気が好き。（色々な人が来て賑やか、干渉がないところがかえっていいなど）」との意見から、子ども食堂としては大規模で人との関わりはそこまで濃くないが、むしろ、それが魅力という声が挙げられている。

【物的なメリットがある】

「1人暮らしの学生ボランティアには、おいでやす食堂でカレーが食べられて助かる。」「学生ボランティ

アには交通費が出て助かる。」「お昼ご飯を美味しくいただいている。」という食事や交通費が支給されることで生活が助かるメリットが具体的に挙げられている。

【関わる中で介護や利用者の人となりを理解できる】

「介護について興味がある。ボランティアをすると人間の生き様が見える。」「イベントに参加し、利用者と話す、デイでは見られなかった人となりや考えがわかり、興味深い。面白い。」と、継続するからこそ利用者の様々な面を知ることができる興味深さ、面白さを指摘している。

【通しやすい場所にある】

「近い場所にある。」が挙げられている。

【福祉実践の最前線を知る楽しみがある】

「最前線の福祉実践を目指している施設の行方がどうなるのかを見るのが楽しみ。」という実践の質に注目している声が挙げられている。

【ボランティアが得る精神的なメリット、楽しみがある】

ここには、大きく3つの島がある。『多様な人との出会いと交流ができる場』では、「おいでやす食堂に来ると、学生ボランティアは、学年・学部・学科を超えた交流ができる。」「おいでやすフェスティバルには留学生もやってくる。お茶や着物を楽しんでもらえている。」「多様なバックグラウンドの多世代な人たちと出会えるので楽しい。」「おいでやす食堂では、参加者（地域の方）やボランティアと出会えるので楽しい。」「おいでやす食堂に来ると、他大学の学生とも出会える。」というように、主に食堂やお祭りで多様な人たちとの出会いがあることが楽しみという声がある。『ボランティアをすることによる自分へのご褒美がある』では、「満足した疲れ、いい気持ちになる疲れがある。すると「また、行こう」となる。」「利用者さんから元気をもらっている。」「学生ボランティアにとって、子ども達と遊べて、純粋に楽しい時間になっている。」というように、ボランティアをすることがむしろ楽しみとなり、元気をもらい心地よい疲れが味わえるボランティアの醍醐味が表れている。『ボランティア同士が親しい関係になれる』では、「人と人との輪が好きだから（人間関係にこだわらない。）」「ボランティア同士が仲がいい。」というボランティアに行くからこそ築ける新たな人間関係、人と人との繋がりを持つこ

とができる喜びが挙げられている。

V. 考察

今回の結果からは、先行研究で見えてきた「所属感を感じる」ところが大いに現れた結果であった。それは、ボランティアの参加動機とは必ずしも一致しない、継続にとって最も影響を与える部分であった。施設の継続ボランティアの場合も、その有効性が見て取れる結果であった。また、先行研究でもあったような、「共に活動を創る」体験や「ボランティア同士の絆」、適切に役割を設けマネジメントされる「適材適所」、「ボランティア同士のコミュニケーション」「知識・技術を活かせる」「自己成長」「社会の役に立つ実感」といった要素も KJ 図からは読み取ることができる。本章では、施設で継続をするボランティア自身から出された意見から質的研究で導き出された継続の理由について、総合的に考察していく。

1. 活動を支える環境

今回の研究で明らかになったことの1つは、継続ボランティアを生み出す、支えるためには、施設実践そのものの質が問われているという点だろう。前述したように、ラベル群は最終的に、12のカテゴリーに分類された。それぞれは関連しあい、相互作用をする中で、継続ボランティアを生み出している。その土壤となっているのは【明るく周りを惹きつけ、やる気を鼓舞するリーダーの存在】、【ボランティアから見ても利用したいと思える施設実践がある】【しっかりとマネジメントされた施設職員の総合力】【ボランティアが魅力を感じる、施設が備えているストロングポイント】という、いわば施設実践そのもののクオリティそのものであった。そこに、信頼感、安心感、満足感を感じているから、継続をするということから、どのようなことがいえるだろうか。

1つは、明るく積極的に、自らも汗をかき実践を牽引するリーダーの姿をボランティアが普段から目にしていることが大きな影響を与えている。そして、そのリーダーのもと組織全体でより良い実践をしようと努力する職員も、大きな影響を与える存在である。そこでボランティアが目にするのは、創意工夫された多彩なプログラム、利用者が楽しむ姿、地域住民の繋がる

場にもなっている、地域にも貢献する施設の様子である。ボランティアは、自分の目に映るそうしたことをしっかりと観ていることがわかった。そして、それこそが、高齢者福祉施設「西院」で継続をする大きな理由として表れている。このことから、リーダーの、職員の業務に取り組む姿をボランティアにいかにか“見える”化するか、今後も検討の余地があるだろう。

しかし、そもそも、ボランティア参加の有無は関係なく、施設実践の質の向上は福祉職として本務であり、脈々と続く日々の実践をより良いものにするために、組織をあげて常に研鑽せねばなるまい。実はその部分が、継続を促す土壌となり、土壌が肥えれば、ボランティア参加の促進にも効果があると、この図1は教えてくれている。

2. ボランティア個人が活かされ、やりがいを感じられるプログラム

ラベル群の中には、前節で示したような活動を支える環境とは異なる、ボランティア個人が感じるやりがい、楽しみ、喜びといった部分も、多く表れていた。【ボランティアが得る精神的なメリット、楽しみがある】【福祉実践の最前線を知る楽しみがある】、【関わる中で介護や利用者の人となりを理解できる】【居心地のいい空間がある】【ボランティアが役に立つと思わせてくれる役割がある】【職員と親しくなることに喜びを感じる】という、ボランティア側が得られるメリットの部分である。

ボランティアは無償で活動する存在で、その行動に求める報酬は賃金という金銭的なものでないことは言うまでもない。とはいえ、ボランティアが抱く欲求は昨今では多様化している。生きがいや自己実現、或いは学習機会や仲間や居場所を求めてボランティアをする人は少なくない¹⁴⁾。図1からは、今回の協力者6名それぞれの多様な欲求を満たす活動となっていることがわかった。

このラベル群の中で、【職員と親しくなることに喜びを感じる】は、前節と強い関連があるように思える。施設の総合的な力、そこに尽力している職員と仲良くなれることそのものが喜びなのである。その職員たちと共に、ボランティアと利用者、ボランティア同士とのコミュニケーションを図り、ボランティア個々の持つ強み、得意なことを活かし、高齢者福祉施設「西院」

の施設実践の役割の一つをボランティアの立場で担い、役立っている感覚が持てる。まさに、集団への帰属感をより強めることにも繋がっているのではないだろうか。

3. ボランティアが参加しやすい条件整備

今回の調査の協力者は、20代の学生と60代以上の人たちである。それが故という事情も影響しているかもしれないが、【通いやすい場所にある】【物的なメリットがある】という2群は、若者・高齢者に共通してあることが確認できた。自宅や大学から近くにあり、通いやすいということは継続の何よりの強みだ。また、学生から、西院おいでやす食堂の食事や交通費が挙げられ、経済的な負担感なく参加できることが継続につながると述べている。60代以上のボランティアからも、活動中に提供される食事が美味しいとの意見があった。高齢者福祉施設「西院」では、昼食時間をまたいで活動の際はランチを提供することにしており、それをメリットとして捉え、継続しやすいという声が挙がっている。ボランティアが“このような条件があれば助かる”ということを具体的に仕組みとして整備することで、継続をサポートすることになる。

総合すると、今回の研究から大きくは次のことがいえるのではないかと考える。①. 真摯に福祉に取り組む職員とそこで生み出される実践をボランティアがつぶさに観る中で、気づきを得、高齢者福祉施設「西院」を好ましく思う気持ちが醸成される。②. 高齢者福祉施設「西院」の職員と親しくなり、介護現場への理解も深まる。ボランティアの立場で役割を持ち、自分が活かされる。人と人とのコミュニケーションや理解が広がり、楽しみ、やりがいや所属感が持てる。③. 交通費、食費のサポートなど参加しやすい条件整備がある。これらが相互に影響しあい融合しあいながら、高齢者福祉施設「西院」の継続のボランティア活動は成立している。このことから、特に①がボランティア継続の大きな着目点であったことは、今回得た重要な知見ではないかと考える。

このことから、地域に点在する多くの施設で、継続ボランティアの参加を得て、地域住民の福祉活動への参加の場、住民同士の繋がりあう場、施設利用者へ理解を深める場として機能していくための、一つの示唆

は得られたのではないだろうか。

ただ、今回の結果は、あくまで高齢者福祉施設「西院」に集う6名のボランティアの質的研究から導き出したものであり、研究の限界もそこにある。また、継続をしたボランティアに焦点を当てているため、ボランティア受け入れの課題全般には言及はできていない。全国には、様々な分野、種別、運営母体、地域性等を持つ施設があり、それぞれ継続に影響する事柄も変わってくる可能性がある。そこは今後の課題として提示しておきたい。

謝辞

本稿の執筆に際し、高齢者福祉施設「西院」のボランティア・職員の皆様、ボランティアとして参加している京都光華女子大学学生スタッフ、その他、協力いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

<注>

- 1 岡本榮一（1981）、大阪ボランティア協会編『ボランティア参加する福祉一』、pp30-32、ミネルヴァ書房
- 2 守本友美（2001）「社会福祉施設におけるボランティア受け入れの現状と課題」、厚生労働統計協会編『厚生指針第58巻第5号』、pp34、厚生労働統計協会
- 3 厚生労働省は、2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。自助・互助による住民相互の助け合いも期待されている。（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/）
- 4 厚生労働省によると、社会構造の変化や人々の暮らしの変化を踏まえ、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超越して、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民

一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すものとされる。

(<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>)

- 5 高齢者福祉施設「西院」(京都市右京区)は、2017年、2018年の本学研究紀要にて、筆者と共著で「社会福祉施設が創り出すネットワーク構築の試み～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の分析から～(2018)」「地域共生を目指す居場所づくりに関する研究：京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から(2017)」をまとめており、本論文で事業所名を論文に掲載することについても了解を得ている。
地域共生を目指す居場所づくりに関する研究：京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から
- 6 内閣府(2016)『平成28年度 市民の社会貢献に関する実態調査』、pp.8
(<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/shiminkouken-chousa/2016shiminkouken-chousa20190917> 取得)
- 7 東京都(2017)『都民等のボランティア活動等に関する実態調査』、pp.43-46
(<http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2017/03/30/11.html>20190917 取得)
- 8 橘香織、石田菜月、堀田和司(2019)「障がい者スポーツのボランティア参加および活動継続に関する要因についての検討」『茨城県立医療大学紀要』、pp.93
- 9 橘香織、石田菜月、堀田和司(2019)、前掲書、pp.96
- 10 勝又直、芳賀博(2016)「病院ボランティアへ参加する高齢者の活動継続要因に関する研究」、『老年学雑誌6』、pp.1、桜美林大学大学院老年学研究科
- 11 桜井政成(2005)「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー5(2)』、pp.110-111、日本NPO学会
- 12 これらは高齢者福祉施設「西院」がオリジナルで名付けているボランティア活動の呼称である。

- 13 南多恵子、河本歩美、田端繁樹(2018)「社会福祉施設が創り出すネットワーク構築の試み～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の分析から～」、pp.104『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要56』京都光華女子大学短期大学部
- 14 日本ボランティアコーディネーター協会編、早瀬昇、筒井のり子著(2015)『ボランティアコーディネーションカー市民の社会参加を支えるチカラー』、pp.21、中央法規出版

<引用参考文献>

- 岡本榮一(1981)、大阪ボランティア協会編『ボランティア参加する福祉一』、ミネルヴァ書房
- 勝又直、芳賀博(2016)「病院ボランティアへ参加する高齢者の活動継続要因に関する研究」、『老年学雑誌6, 1-14』、桜美林大学大学院老年学研究科
- 川喜多二郎(1986)『KJ法—混沌をして語らしめる』中央公論新社
- 桜井政成(2005)「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー5(2)』、日本NPO学会
- 筒井のり子監修(1998)『施設ボランティアコーディネーター』、大阪ボランティア協会
- 東京都(2017)『都民等のボランティア活動等に関する実態調査』
- 内閣府(2016)『平成28年度 市民の社会貢献に関する実態調査』
- 日本ボランティアコーディネーター協会編、早瀬昇、筒井のり子著(2015)『ボランティアコーディネーションカー市民の社会参加を支えるチカラー』、中央法規出版
- 橘香織、石田菜月、堀田和司(2019)「障がい者スポーツのボランティア参加および活動継続に関する要因についての検討」『茨城県立医療大学紀要』
- 南多恵子、河本歩美、田端繁樹(2018)「社会福祉施設が創り出すネットワーク構築の試み～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の分析から～」、『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要56』京都光華女子大学短期大学部

- 南多恵子、河本歩美、寺本珠眞美（2017）「地域共生を目指す居場所づくりに関する研究：京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要 55』京都光華女子大学短期大学部
- 守本友美（2001）「社会福祉施設におけるボランティア受け入れの現状と課題」、厚生労働統計協会編『厚生生の指標第 58 巻第 5 号』、厚生統計協会